【実践報告】

# 子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る　－10－

## ――園庭における自然との関わりを深める――

大仲美智子*・笹井　邦恵*・矢越　里花*
岡本なつき*・芝池　　親*・井上美智子**

キーワード：環境教育　自然　保育

## 1　はじめに

本園では、幼児期の環境教育の観点から、身近に自然を感じ「自然が大好き、大切にしたい」と思える子どもを育てるための保育環境や活動のあり方を探ることを目的に、2010 年度から実践研究を始めた。初年度の 2010 年度は 5 歳児のみを対象とした実践研究を実施し、2011 年度には 0 歳児から 5 歳児に対象を拡大した[1),2)]。2012～14 年度は「保育者集団のレベルアップ」を目的として、研究推進委員を年度ごとに選出し保育者主体の実践研究を進めたり、様々な係を設け、保育者がその係を担当し活動したりして全員が環境教育活動に携わるようにした[3),4),5)]。2015 年度は、保育所から幼保連携型認定こども園に移行したため、「小学校への接続」も意識して環境教育に取り組むことにした[6)]。2016～18 年度は、園庭にビオトープを造成し、「ビオトープでの子どもの遊び方」「保育者のビオトープでの子どもへの関わり方」「ビオトープの管理方法」などをビオトープ施工管理の専門家から定期的に学んだ。また、保護者や地域との連携を深めるため、造成したビオトープの環境改善や維持管理に保護者や地域の方と共に作業をする「緑育の会」を年に 2 回ほど開催し、保育者も参加して維持管理作業をしてきた[7),8),9)]。2019 年度はビオトープ管理を保育者中心に行うことになり、日々変化していくビオトープ環境に戸惑ったり、苦慮したりしながらも維持管理に努めた。ここでは、ビオトープを中心とする園庭で見られた自然との関わり、及び、それを深めるための保育実践を中心に 2019 年度の活動実績を報告する。

*登美丘西こども園（大阪府堺市）
**大阪大谷大学教育学部

## 2　実践方法

本園の実践研究では幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づき、子どもの「主体性」とあわせて、環境教育の観点から「五感」と「つながり」を保育者が意識するようにしている[10),11),12)]。本年度も従来のように、各保育者が保育の中で目を留めた事例をあげ、それらの事例を毎月の研究会で討議することを継続した。「子どもが自ら考え、切り拓く力を育てる」ことを引き続き目標とし、経験の数・種類を増やすのではなく、一つの経験の内容を豊かにすること、そして、子ども自身の考える力や答えを見つける力を育てるためにどうしたらよいかを考えることに留意しながら保育を実践している。具体的に言葉で表現できない 0・1 歳の子どもに対してはできるだけ子どもの声を待つようにしているが、子どもの反応が少ないと思わずに、保育者が「感じたこと」「考えたこと」「伝えたいこと」を言葉や身振りで積極的に伝え、また、「色や触った感じはどう？」「何か聞こえるね」「どうなるかな？」など、子どもの五感を働かせるような言葉かけや考えをたずねるような問いかけをし、表情やしぐさを見て保育者が言葉で共感するようにした。また、2 歳から 5 歳の言葉で表現できる子どもに対しては「そうやね」と共感し、「友だちと一緒に考えてみる？」「なぜ、そうしたの？」など、保育者が答えを与えるのではなく、子どもが自ら考えたり、答えを探し出したりするよう促す言葉かけを意識した。さらに、子どもの多様性を尊重するため、子ども一人一人の自然に対する気持ちや環境への関心度を見ながら関わるようにした。

保育者は昨年度同様、研究推進委員、稲作係、エコ・マネジメント係、園庭係、カリキュラム・マネジメント係、玄関ホール係、菜園係のいずれかの係を担当して活動し、保育環境の整備や教育保育活動の改善に努めた。すべての係が絵本やポスターを活用し、保護者や地域へ発信し連携することを意識して活動した。毎月、事例を討議する研究会で、係活動を報告して、全員が各係の動きを確認できるようにした。本稿では 2019 年 4 月から 11 月までに取り上げた事例の内、環境教育の観点から子どもの育ちが読み取れると思われるものを抽出して考察すると共に、各係の活動成果をまとめて報告する。

## 3　子どもの活動

### 3.1　5 歳児

〈ビオトープでの自然遊び〉

毎日園庭遊びをしているが、今年の 5 歳児はビオトープで植物や動物に触れて遊ぶ子どもと、追いかけっこやボール遊び、鉄棒や大型遊具などで遊ぶことが好きな子どもにわかれてい

る印象があった。そこで、興味の薄い子どもにも関心を持ってもらいたいと考え、9月9日にビオトープだけに場所を限定して遊んでみることにした。32人の子どもが6つのグループにわかれ、観察用の虫かごと虫メガネを持ち、虫（小動物）探しをした。すぐに、一つのグループが身近なダンゴムシを見つけ「先生！ダンゴムシ、ゲット！」とうれしそうにしていたが、虫を見つけられないグループもあったので、一度集合して虫を見つけたグループにどこでどんな虫を見つけたかを発表してもらった。それから虫探しを再開すると、すべてのグループが虫を見つけることができた。その後、保育室に入り、グループごとに自分たちが発見した虫の特徴やどんな場所にいたかなどを発表した。保育者が「また、ビオトープで虫探しをして、発見したことをみんなに教えてね」と伝えると、虫が大好きなK児は「先生、僕今日もう一度ビオトープで遊んでみるわ」と言い、夕方の園庭遊びでも草をかきわけ虫探しをしていた。

9月9日に全員で虫探しをしたことで、ビオトープで虫探しや虫捕りをする子どもが増えた。9月19日もビオトープで7、8人が集まり、バッタ探しが始まった。草をなでるように手で触れ、パッと飛び出すバッタを見つけて追いかけていたU児が「先生、おるで」と興奮して教えてくれた。虫好きのK児は「おった！　エンマコオロギ！！」と見つけて周囲にいる子どもたちに知らせていた。すると、「どこ、どこ？」と騒ぎになり、K児が「ここ、ここ」と指をさしたものの、エンマコオロギはピョンと跳んで隠れてしまった。集まったみんなで草をかきわけ辺りを探すと、再びK児が葉の上でじっとしている体長3 cmくらいのエンマコオロギを見つけた。K児が「おったで」と声を出すと、今度は騒がずそっと集まり順番に静かにエンマコオロギを見つめた。別の女子のグループは、自分たちでエノコログサのブレスレットやノブドウで彩り豊かなアクセサリー、名もない雑草をくるりと巻いて眼鏡など、ビオトープで見られる草花を使い、かわいいと思えるものを自分たちで考えて次々と作り、身につけては誰かに見せに行く遊びをしていた。園庭に落ちているどんぐりもままごとで食料になったかと思えば、ピカピカに磨かれて宝物のようにもなっていた。

10月4日も、朝、登園してくるなり子どもたちは虫かごを片手に虫探しを始め、たくさんのバッタ、時にはコオロギを見つけていた。K児もその中に混ざって虫探しをしていたが「エンマおった！」と声をあげると同時に捕まえた。K児は捕まえても、虫の立場になってすぐに逃がすことができる子どもである。その際、K児が「なぁ先生、エンマコオロギって何食べるん？」と聞いてきたので「知らないな。本に載ってるんじゃないかな」と答えると、園庭でいつでも見られるように置いてある小さな図鑑の中から『秋の自然』の図鑑を手に取り調べ始めた。K児が「え・ん・ま・こ・お・ろ・ぎ…」と言いながらぱらぱらとページをめくっていくと、そのページがあった。けれども、そこには飼い方が載っていて、食べ物としてキュウリやカボチャ、ナスなど飼育下で人間が用意する物ばかりが記載されていて、K児が知りたかった答えではなかった。結局、答えはわからないままK児がそのまま続けてページをめくっていくと、別のページにバッタ釣りが載っていた。「バッタ、釣るんやって！」とK児が目を輝かせたので、保育者と一緒に作ってみることになり、ちょうどよい長さ、太さの木の枝や植物の茎を探した。作りあげると、K児が「釣ってくるわ！」と勢いよくビオトープに走っていったので見送った。しばらくすると実際に「釣れたでー！」とバッタを釣って戻ってきた。

10月に入ると、1ヶ月程前からビオトープの小川で巣を作っているジョロウグモを見ることが子どもたちの楽しみとなっていた。時にはバッタやチョウがクモの巣の近くを飛び回り、近づいた一瞬のうちにクモが捕獲する素早い動きを見ることができた。10月20日、クモは日に日に体が大きくなっていて、そのことを話しながら子どもと保育者が観察していると、突然、クモが自分と同じくらいの大きさのバッタを瞬時にとらえ、動けなくなるまでグルグル巻きにした。小さい動物が捕まる様子とは違い、あまりの迫力に保育者が思わず「うわぁ」と大きな声を出したので、他の保育者や子どもたちが集まってきて、その様子を見た。「バッタ食べられる！」「まだ動いてる、足バタバタしてる」

と見ている子どもたちは口々に言っていた。するとK児が「先生、クモとハチだったらどっちが強いんやろ？」と聞いてきたので「どっちだと思う？」と返すと、「僕はハチのほうが強いと思う」と答えてくれた。

＝考察＝

今年の5歳児クラスは保育者のまわりで遊ぶ子どもが多く、自然に自ら興味を持って思いっきり遊ぶ子どもが例年以上に少ない印象があった。そこで、自然に関心を深めるきっかけ作りにしたいと考え保育者が意図的に虫探しという活動を提案した。生活面や他の遊びではしっかりした子どもでも、虫探しをすると園庭にいる虫の種類や居場所がわからず、すぐには見つけられない。そこで、虫探しをする途中に子どもたち同士で虫の居場所に関するヒントを伝えあう時間をもった。結果として、自分たちがいつも遊んでいる園庭の様々な場所が虫の居場所になっているということに気づき、自分の目で確かめ、新たな発見をすることができた。友だちの発言に「すごいな」「いいなぁ」と素直に感想を言い、自分もやってみたいという気持ちになったようだった。

5歳児にとっては、2歳児の時にできたビオトープの存在が当たり前の風景になっている。しかし、学年が進むにつれ、身近な遊び場として動物の住みかや植物の育つ場所として関心を持つことができた子どもと、他の遊びに興味があっても植物や動物に触れて遊ぶことに興味がなかった子どもにわかれた。結果として、自然に興味が持てなかった子どもは、同じ「何かを見つける」という遊びでもかくれんぼや宝探しゲームならできるが、虫が対象となると見つけられない。自分で探して見つけてこそ、楽しさや面白さを感じられ、虫に関心を持つことができるはずである。意図的に取り組んだ活動をきっかけに虫にあまり興味がない子どもたちも園庭ビオトープの自然の変化に気づき、遊具や砂場だけでなく園庭ビオトープのまわりに集まり、自然遊びをすることが多くなった。一方、虫の居場所に詳しく捕まえることができる子どもは、捕まえられない子どもたちから「○○くん、来てー！」「捕って」と頼られ、意気揚々とそれに応え、それが自信につながった様子であり、なかでもK児は頼られることで虫探しの楽しさが一層増していったようであった。K児は、元々何事にも好奇心旺盛で、物事を予想したり、調べたり、何でも試してみたりする力がある。毎年同じように見える園庭でも年々姿や起こる現象が違っていることに気づいたり、「バッタ釣り」の道具を作る工夫ができたりするなど、園庭の自然が豊かであることでK児に観察力、探究心、思考力の育つ機会が豊かに与えられたと考えられる。以上のように、同じ園庭で遊んでいても園庭にいる生物への関心度が子どもによって異なる実態から、下の学年でも保育者がこうした取り組みを意図的に取り入れ、子どもの関心を高めるきっかけを継続的に作っていく必要があると思われた。また、ちょうど秋が深まっていく季節であったため、園庭には色づく葉や木の実、枯れ枝、たくさんの草花、ひっつきむしなどの植物があふれ、虫もバッタやカマキリ、コオロギなどが生息し、自

然に触れて遊べる環境が整っていたことも興味を維持できる要因になったと考えられ、活動時期の選択も重要だとわかった。

今年は初めて大きなジョロウグモが園庭ビオトープにやってきて巣を作り、約2ヶ月、毎日見ることができた。巣はずっと同じ場所に作られていたのではなく、小川の近くから離れず、時々場所を移動していた。一日でこんなにも立派な巣ができるのかと感心したり、張り巡らされた糸に雨水がつきキラキラと輝く様子に感動したり、体の模様も美しいジョロウグモの姿に子どもも保育者も夢中になった。時にはバッタやチョウなどの虫が捕まり、ジョロウグモと戦い、食べられたり逃げ延びたりする様子を見つめ、自然の摂理を身近に感じることができた。台風が通った次の日にはジョロウグモの姿が見えなくなり、巣もなくなって「どこにいったんやろう」「家がなくなったな」と心配そうにたくさんの子どもたちが集まった。特別なことではなく毎日のようにビオトープに来てクモの様子を観察していたことで、気づくことができた変化であり、感情移入してクモに共感し、クモの立場に立って考えられるようにもなっていた。その後、ジョロウグモは見られなくなった。大きな台風がきて、その影響で身近な動物やその住みかに実際に変化が起き、それを発見して自分の気持ちが揺り動かされる。このような経験を積み重ねていくことこそが、将来、環境問題についても考えることができる大人になる一歩ではないかと考えられる。

### 3.2　4歳児

〈アサガオの種を探そう〉

5月9日にアサガオの種を一人1粒、手のひらに乗せて大きさや形を観察した後、プランターに植えた。毎日観察することができるようにプランターを園庭に置いたので、水が足りないと思った子どもはジョウロで水やりをするなどしてアサガオの生長を楽しみにしていた。6月に入ると蔓が伸び、7月には花が咲き始め、「見て！　見て！　アサガオいっぱい咲いてるねん！」「わぁ！　上の方まで咲いてるな！」と喜んでいた。そして、8月に入ると枯れた花の部分から種ができ始めた。

8月23日、保育者がアサガオの観察をしているとM児とS児が見に来た。M児は「あんなところまで花ある！」と5メートルほど上に咲いているアサガオを見上げ、観察していた。花の観察を終えた後、土の上にアサガオの種が落ちていたので、保育者は手に取り「これ何やろう」とたずねてみた。M児もS児も少し考えてから「アサガオの種！」と自信満々に答え

た。あまりに自信に満ちていたので保育者が「なんで、わかったの？」とたずねてみると、M児は「だってアサガオのところにあるもん」と答えた。保育者は、さらに「種はどこにあるんかな？」と聞いてみた。S児は「わからん」と応えたが、M児は「土からとったんちゃう～」と、保育者が土の上から取ったことを見ていたようだ。「他のところにもあるよ」と保育者が伝えると、M児は花の中や茎のところなどを探し、S児もM児の様子を見て同様に探し始めた。M児は「あ！これや！」と茶色の膨らみ（子房）を見つけると、指で中の種を取り出した。S児もM児が見つけた種を一緒に観察している。M児は一つ見つけると、次々に茶色の膨らみを見つけては、種を取り出した。種を探しながら保育者が「種植えたらどうなるんかな」とたずねてみると、S児は「アサガオ出てくる？」と悩んだように言い、M児は「アサガオ生えてくるで」と自信満々に答えた。「また、アサガオが咲くんやね。でも、次はヒマワリが咲くかもよ？」と保育者は子どもを少し惑わすようなことを言ってみた。しかし、M児は「アサガオから出てきたからアサガオやで」と明言した。「なんで、種できたんやろうなぁ」と保育者がつぶやくと、M児は「私たちが前にこの種を植えて、（アサガオが）種植えてくれてありがとうって言ってるからやで」と想像を膨らませながら答えてくれた。S児は違う遊びへ行ってしまったが、M児はその後も夢中で種を探していた。

11月に入り、長く咲いていたアサガオが枯れ、蔓や葉っぱも茶色く変化してきた。それでも一輪だけ咲いているアサガオがあり、「ここだけ咲いてるなぁ」と発見したり、M児はその後も「先生、種見つけた」と持ってきてくれたりした。11月25日、クラスで上の方まで伸びていた蔓を支柱から外し、種探し・種取りを行った。M児は以前から見つけていたこともあり「これはアサガオの種やねんで」「ぷくってなってるところに種があるんやで」と友だちに教えていた。M児の様子を見て、まわりの子どもも種を探し始めた。「丸い実の中に入ってるんやな～」「緑の実もあるで」「緑の実から白い種がでてきた！」「また植えような」など、種を探しながら子どもたちは自分の発見を言葉にしていた。C児は、取った種を手のひらにのせ、「これアサガオの種って知ってたで。だって僕が植えたもん」と言い、秋の終わりに手にした種と春に自分が植えた種と同じだということに気づいた。C児は「種を植えてな、水をあげてぐんぐん伸びてアサガオが咲いてんで」と言い、M児は返答するかのように「それでな、花が減ってきて種ができてん」と言った。「じゃあ、この種を植えると何が咲くの？」と保育者が聞くと「うーん」と考える子がいる中で、M児とC児は「アサガオやで！」と自信満々に答えていた。C児は「また植えたい」と言

い、周りの子どももそれを聞いて「植えたい」と言い出した。しかし、M 児は「あかん、次のきりんさん（4 歳児）が植えるねん」と、以前、保育者と話していたことをみんなに伝えた。そこで、保育者がみんなに「どうする？」と聞くと、「そうやな！次のきりんさんにあげる」と言う子がほとんどだったが、C 児は最後まで自分の手に種を持ち、手放したくない様子だった。しかし、最終的には C 児も種を入れる箱に入れ、クラスのみんなで観察した。その後は袋に入れて来年の 4 歳児クラスに渡せるように保管している。

＝考察＝

4 歳児クラスではアサガオの他にも、ナスやタマネギの苗植えを行った。毎日菜園当番が菜園へ行き、畑の苗に水をあげたり観察したりして、自分たちが植えた野菜の生長を楽しみにしている。自分たちで植えた植物で世話をしているから、より愛着を持って観察したり、生長を喜んだりできるのではないだろうか。5 月にアサガオの種まきを行い、11 月下旬に種取りを行うまでの約半年間、子どもたちはほとんど毎日アサガオの生長を観察してきた。長期間観察することで、種から芽が出て蔓が伸び、花が咲き、花が枯れた後には種ができるというアサガオの一生を知る機会とすることができた。

M 児は 3 歳児クラスの 12 月から入園してきたが、動物や植物にとても興味があり、毎日のように昆虫などの小動物を探したり植物をじっくり観察したりしている。植物を食べることにも興味があり、春にはオオシマザクラの実、夏にはヤマモモなどを探しては食べることを繰り返していた。食べるだけでなく食べた実から種がでてきた時には、種を集め土に植えている姿もあった。なぜ植えているのかを聞くと、「種を植えたらまた実ができるから」と種を植えることで、また芽が出て大きくなり実ができることを絵本や保育者の話などから知っているようだ。M 児の言動からはアサガオから採れる種はアサガオの種であること、その種からはアサガオが咲くことを理解していることがわかる。さらに、アサガオの目線になって「（アサガオが）種植えてくれてありがとうって言ってる」という言葉も出た。植物の命の循環を理解しているだけではなく、植物に対しても共感できる姿である。また、M 児は来年度の 4 歳児への気持ちも示すことができた。この自然への関心が高く共感性もある M 児の関わり方はまわりの子どもにも影響を与えた。種の存在に気づいていなかった S 児や C 児は M 児の行動を見てアサガオの種を探し始めたし、M 児の言動は他の子どもの知識の定着にも影響したと推察できる。

今回、M 児が自分の目線よりもかなり高いところ

に咲いているアサガオにまで気づくことができたのは、日頃からよくアサガオの観察をしていたからだと考えられる。今回は保育者がアサガオの種の存在を知らせてしまったが、M 児の姿からすれば自ら気づくまで待つべきであった。園芸植物の栽培は自然を単純化してみることになる半面、観察しやすいという利点がある。それでも、命の循環を体験することにつなぐためには、世話をしたり、観察したりと関わりを継続しなければならない。また、自然というものに関心の高い子どもの影響力も大きい。保育者は継続的な関わりができるよう環境や活動を考え、仲間から学ぶ機会を意図的に考えていく必要がある。

### 3.3　3 歳児の活動

〈園庭マップ作り〉

8 月 26 日、猛暑で気温が高く暑い日が続いていたが、クラス全員の子どもたちが「魔法の虫眼鏡」（おもちゃの虫眼鏡で、拡大する機能はない）を持って園庭で「生き物探し」をした。ねらいは園庭に暮らしている昆虫などの小動物探しで、その導入として虫眼鏡を用意したのである。普段から園庭で小動物と関わって遊んでいる子どもはすぐに見つけることができ、「ダンゴムシおった！」「テントウムシ飛んで行ったで！」と友だち同士で声をかけあって観察している。一方、「どこを探したらいいのかな…？」「全然いてない…」とどこに小動物が住んでいるのかわからず困っている子どもも友だちに教えてもらいながら観察していた。Y 児と I 児が「先生！早く来て！アリがいっぱいおるねん！」と保育者を呼びにきた。手を引っ張られて、ついていくと、クヌギの下にアリがたくさんがいた。保育者が「なんでこんなにたくさんアリが集まってきてるんかな？」と聞いてみると、Y 児は「ここにセミがいるからやで！」、I 児は「そうやで！アリが食べてるねん！」と保育者に教えてくれた。実際に、よく見てみると頭だけになっていたセミがあった。そこに普段あまり話をしない H 児も近くまで来て、保育者のそばで観察していた。H 児は自然の中で遊ぶことが好きな子どもであるので、保育者は「アリってセミ食べるん？」と聞いてみた。すると、H 児は「アリはセミ食べるねん！」と大きな声で答えた。さらに、保育者は「このアリはどこに行くんやろ…？」と子どもたちにたずねてみた。すると、I 児は指を差しながら「この木の中に入っていってる！」、Y 児は「アリさんのお家やで！」、I 児は「お家でみんなで食べるねんて！」と話しあい、H 児は「違う！ここでセミ食べるねん！」と言っていた。

保育室に戻り、園庭にどんな小動物が住んでいたのかを話しあった。「チョウチョ、飛んで

たよ！」「メダカさん、ビオトープの小川にいてた！」と自分で見つけた小動物やいた場所を発表した。発表を聞いて「私も見つけた！」「初めて知った！」と様々な反応が見られた。保育者は事前に園庭で見つけることができそうな小動物の輪郭のイラストを小さな紙に描いて準備しておいた。自分が見つけた小動物を発表した後、子どもたちは見つけた小動物と一緒だと思うイラストを選び、「ダンゴムシは黒色やったなぁ！」と友だち同士で会話しながら色鉛筆で色を塗り、園庭の写真に貼り付け、ぱんだ組の園庭マップ（夏バージョン）を作った。H 児は見つけたセミとアリのイラストを選びクヌギの下に貼っていた。

季節は夏から秋に移り、園庭に住んでいる小動物も変わってきた。子どもたちはこの時期、どんぐりにとても興味があり、集めたり、ままごとに使ったりして遊んでいた。10 月 23 日も「魔法の虫眼鏡」を持って園庭に出た。今回は小動物だけでなく植物も観察対象にした。ほとんどの子どもはどんぐりや落ち葉を見つけて、「どんぐりあったよ！」「きれいな葉っぱ見つけたよ！」とうれしそうに観察したり、バッタを捕まえて脚や体などを観たり、触られて丸まったダンゴムシを見たりと様々なものに興味を持って活動していた。その中で、保育者は虫眼鏡を持ってただ走っているだけの S 児に気がついた。S 児は 5 月から途中入園し、普段も園庭で遊ぶ時はすべり台を繰り返しすべったり、追いかけっこをして遊んだりと自然にあまり興味がない様子だった。この活動の際も、S 児は何をしたらよいのかわからない様子で虫眼鏡を持ったままだったので、保育者が「一緒に生き物探そう」と声をかけてみた。すると S 児は、保育者の手を取り一緒に歩き出したが、小動物は見つからなかった。困った様子の S 児に、K 児が「こっちおいで！」と声をかけクヌギの木の下に案内してくれた。S 児と K 児が保育者と一緒に地面を観察していくと、S 児が「あ！アリさん！」と木に登っているアリを見つけた。アリはクヌギの木の幹を歩き、上に向かって進んでいた。保育者が「アリさんのお家ってどこなんかな…？」とひとり言のように言うと、S 児は「…上？」とアリの登っている木の上の方を指さした。保育者が「どうしてお家が上にあるの？」と聞くと、K 児が S 児に「アリさんのお家は土の中にあるねんで」とうれしそうに教えていた。

保育室に戻り、前回同様自分で見つけた小動物や植物を発表し、小動物と植物の描いてあるイラストに色を塗り、園庭マップ（秋バージョン）を作った。S 児は保育者と K 児と一緒に観察したアリのイラストを選び、クヌギの木の下に貼っていた。その日の夕方、S 児に「さっき見つけたアリさんってどこに行ったのかな？」と質問してみた。すると S 児は保育者の手を引いてクヌギの木の下まで行き、自分で

見つけたアリを再度見ることができた。ちょうどアリの行列が地面の穴に入っていくところだったので、うれしそうなS児に保育者はもう一度「アリさんのお家はどこにあるんかな…？」と聞いてみた。S児は少し考えてから「…下？」と地面の穴を指さした。保育者が「この穴の中にお家があるんかな？」と問うと、S児は「この中にお家がある」と答えてくれた。

＝考察＝

3歳児は何事にも興味を持ち意欲的に取り組もうとするが、すぐに他のものに興味が移りやすい年齢でもある。普段から園庭で小動物に触れながら遊んでいる子どもは、小動物が生息している場所や好む食べ物をよく理解している。夏にはセミが鳴いて木の幹に止まっているのを見たり、捕まえて観察したりしていた。なかでもY児やI児、H児は、頭だけになったセミを見つけた時にも、「セミが死んでいて、アリがセミを食べている」という事実を驚くこともなく受け入れていた。アリも食べ物がないと生きていけないこと、アリは死んだセミを食べることをわかっているようだった。実体験を通してアリがセミや他の小動物の死骸を食べて命をつないでいることを理解している。一方、今年度入園したS児は、秋バージョンの園庭マップを作った時、小動物がどんな場所で見つけることができるのか、生息しているのかあまりわからない様子だった。今回、S児にアリのいる場所を教えていたK児は昨年入園してきた子どもであり、この1年間の経験が知識となっていることがわかる。そして、S児も実際に土の中に入っていくアリの行列をみて、K児から教えてもらった情報と照らしあわせて、地面の下に住みかがあることを理解したようである。

季節の変化を子どもたちに気づいてもらいたいと考え、夏と秋の2回、園庭マップを作る活動に取り組んだが、夏に見つけることができた小動物が秋には見つからず、反対に夏には見つけることができなかった小動物を秋に見つけることができた。その違いについて子どもたちは「だって寒くなったから」と説明し、夏が終わり季節が秋に移っていることに3歳児なりに気づいていた。絵本などの教材を見るだけでなく、実際に自分の目で見て触れて感じたことは記憶に残りやすいが、本園に在籍している子どもたちは自然と関わる機会が多いために、在籍年数が多い子どもほどその経験が知識や知恵となって身についている。日本には四季があり、季節により動物や植物、生息する場所は変化するが、こうした変化に気づき、命の循環を理解するためには、乳児期から実際に「自然の中で繰り返し遊ぶ経験」が必要であろう。

また、あまり自然に関心がない子どもや本園での在籍年数が短い子どもに対しては、同じ環

境で遊んでいても経験量に差があるため、今回のように「魔法の虫眼鏡」という道具を使ってクラスとして活動してみたり、発表して共有したり、園庭マップづくりをしたりするなど、保育者が意図的に活動を考えていくことも重要である。その際、保育室では積極的に話す子どもではない H 児が園庭に出ると友だちの会話に自分から参加して話す姿を認めたり、S 児のような子どもに積極的に関わったり、K 児と S 児のように友だち同士で育ちあう場面を援助するなど、保育者のなすべきことは多いことも確認できた。

### 3.4　2 歳児

〈バッタは何食べる？〉

夏にはシマトネリコの木にセミがたくさんいたが、9 月になるとセミの鳴き声も聞こえなくなり、ずいぶんと秋らしくなってきた。園庭ではバッタが多く見られるようになり、虫探しに興味のある子どもは小川の周りや草の近くに腰をかがめて虫探しをしている。初めはバッタが怖かった子どももだんだん保育者が捕まえたバッタに触ることができるようになっていた。9 月 28 日、R 児、M 児と保育者でバッタ探しをした。3 人で草の近くをよく観察していると、草の中をピョンと 1 匹のバッタがジャンプした。保育者が捕まえて 2 人に見せると、R 児が「もちたい！」と手を伸ばしたので、R 児に渡すと指でやさしくバッタの背中をつかみうれしそうな様子で、手に持ったまま小川の周りを離れて園庭を駆け回っていた。R 児の様子を見ていた M 児も「M ちゃんもバッタほしい…」と言ったため M 児と一緒にバッタ探しを再開した。M 児も保育者を真似て草の中を手でかきわけてバッタがいないか探す。R 児が再びバッタ探しをしている保育者の元へやってきて「バッタ、バイバイした」と伝えに来た。保育者が「バイバイしたの？」と聞き返すと、「ごはん食べにいってん！　パクパクって」というので、保育者が「バッタさんは何食べるんやろうね？」とたずねると R 児は「うーん」と言ってわからない様子で、そのまま離れて行ってしまった。しばらく M 児とバッタを探していたが、その日は見つけることができなかった。

2 日後、M 児に再び「バッタ探そう！」と誘

われて一緒に探すことになった。今度は、数分もしないうちに、すぐにバッタを見つけることができた。M 児に見つけたバッタを渡すと、バッタの腹を指で持ちうれしそうに友だちへ見せに行った。数分後 M 児が泣きながら戻ってきたので、理由を聞くと友だちに見せていたら逃げてしまったというので、もう一度バッタ探しをした。2 人で探していると、バッタを探すことが上手な 3 歳児クラスの子どもが「どうしたん？」と聞いてきたためバッタが逃げてしまった話を伝えると「あげるよ！」と M 児にバッタを渡してくれて、M 児はとても喜びバッタを受け取った。保育室に入る前に M 児にバッタをどうするか聞いてみると、「バイバイする」と小川の近くの草むらに逃がしていた。

11 月 22 日、青々としていた草も茶色くなり園庭で見かけるバッタの数も減ってきた。そんな中でも虫探しが好きな子どもたちは「バッタ探そう！」と保育者を誘いバッタ探しに励んでいた。9 月末にバッタが何を食べるのかと悩んでいた R 児に同じ質問をしてみたら、「葉っぱ食べるねん」と得意げに教えてくれるようになっていた。S 児もバッタ探しが好きでバッタを見つけては、口元に藁や落ち葉や葉っぱなどを持っていく姿があった。バッタの腹側を自分と対面するように持って落ち葉をつかませようとしたが、バッタは落ち葉を持とうとはしなかった。次に藁をバッタに与えてみるとバッタは藁をつかんだ。「見て！食べてる！」と興奮して保育者に教えてくれた。実際には食べてはいないのだが S 児の気持ちに寄り添い「ほんとだね、食べてるみたいだね」と一緒に観察をした。何度も試す中で S 児なりにバッタはどれが好きか考えているようで、バッタを見つけると決まってヨモギの枯れた葉を取り、与えていた。保育者が「なんで葉っぱをあげているの？」とたずねると「だってバッタさんお腹すくから」と答えながら葉っぱをつかませていた。なぜ枯れたヨモギがよいのかとたずねてみると「だってな、バッタがこれが好きって言ってたから」と教えてくれた。ヨモギの葉っぱを一度だけつかんでいたことがあったが、いつものように「食べている！」と教えてくれた。

12 月になり園庭の草も枯れて風が冷たくなり冬らしくなってくると、バッタの姿が見られなくなり、バッタがいないとわかっているのか、子どもたちが「バッタ探そう！」と言うことはなくなっていた。12 月 11 日に、S 児と小川の近くで遊んでいる際に保育者は「バッタいるかな？」とたずねてみた。すると「いてないで。だってお家にご飯食べに行ってるから」と説明してくれた。

＝考察＝

この事例に出てくる 3 人の子どもは昨年からの在籍児で、本園で 2 年目を過ごす子どもたちである。夏には保育者がセミを捕まえて見せると「怖い」と逃げていた子どもたちであったが、次第に手で触り、つかむことができるようになった。バッタも同じで、初めは恐る恐る見ているだけだったが、気づけば自分たちで探し出し、保育者が捕まえたバッタをつかめるようになっていた。初めのうちは強く握ってしまってバッタを弱らせてしまうこともあったが、何

度も経験するうちにどのくらい力を入れればよいのかに気づくようになってきた。そして、捕まえて満足したら、元の場所に戻すことも自然にできている。部屋に持って帰ろうとはせずに捕まえても元々いたところに戻している。保育者がそうするように言葉がけをしなくとも、上のクラスの友だちの言っていることを聞いたり行動を見たりしているからだろうと考えられる。

初めはバッタが何を食べるのかわからなかったR児が11月になると「葉っぱを食べる」と言い出したこと、また、S児がバッタに葉っぱをつかませて「食べている」と言ったことなどバッタの食べ物への興味も具体化し、バッタも人間と同じで食べ物が必要と考えている様子が見られる。S児はどの葉っぱが好きかを試し、バッタは何が好きなのかなと考えることができるようになってきた。こういった経験を繰り返していくことが、就学後に学ぶ「自然界には食物連鎖があり、植物と動物が共存していること」を実感として理解するための第一歩になるだろう。また、12月になり寒くなればバッタの姿が見えないことに気づいた。季節が変わればバッタがいないことも理解し、季節を感じる力が育ち始めていることがわかる。園庭ビオトープには食物連鎖を知ることのできる場面がたくさん存在している。絵本で見るだけではなく実際に虫たちに出会うことで、より記憶に残り来年、再来年にまた同じ状況を見た際には、もっと深く考えていくことができるようになると推察される。

2歳児はまだ食物連鎖について理解することは難しいが、その芽生えはみられる。自然体験を繰り返す中で様々なことに「もっとみたい」「なんでだろう」と興味をもち、様々な疑問を持つようになり始めているので、友だちや保育者と共に一つ一つの小さな体験を積み重ねることにより興味はさらに広がり深まっていき、自らが考えて答えを出すことができるようになっていくと考える。理解するのが難しいから学びの機会がないのではなく、難しいからこそ子どもたちの「なんでだろう」という素朴な疑問が生まれる。それに耳を傾けていき、友だちや保育者と共に考えて解決することで学びが深まっていく。そして、今年体験したことが記憶として残り、新たな発見へつながっていくと考えている。

### 3.5　1歳児

〈初めてのオリーブの木〉

5月下旬、オリーブの木の鉢植えが分園に届き、園庭の子どもの目がよく届くところに置いた。子どもたちは初めて見る大きいオリーブの木に驚いたり、「これはなんだろう？」と不思

議そうに見上げたりしていた。中には「大きい！　すごい！」「これ何？」と自分の思いを言葉にする子どもがいた。その中でF児が「おっ！　おっ！」と言い、木の上の方に咲いている白い花に気づき指さしたので、保育者がF児をそっと抱きかかえ目の前で花を見せると、最初は人差し指で優しく触っているだけだったが、突然白い花をつまんでちぎってしまった。保育者は「お花痛いんじゃないのかな？」と声をかけると、F児はじっとその花を見ていたが、保育者に降ろしてもらうとちぎった花をそっと自分から地面においた。その場面を見ていたY児がオリーブの木に近づき「いっぱいお花ある！」「これ何？」と保育者にたずねてきた。保育者は「これはオリーブと言って、毎日水やりをすると白い花が咲いて実になるんだよ」と伝えた。その言葉を聞いたY児は早速「Fちゃん！　水やりしよう」と言ってF児を誘い水やりを始めた。その後も園庭に出るとY児は周囲の子どもを誘い、オリーブの木を観察し、水やりを続けている。

6月14日、Y児はオリーブの木のそばに落ち葉があることに気づいて集め始め、「ほら！これ黄色！」と保育者の手のひらに乗せた。「黄色い葉っぱ集めてるの？」とたずねると「うん、黄色がきれいなの！」と保育者が渡した茶色の葉は捨てて黄色の落ち葉ばかり集め、ままごと遊びを始めた。

6月19日、いつものようにオリーブの木をながめていたY児は緑の葉の中のふくらみ始めた小さな緑の実に気づき「あっ！なってる！」と保育者に知らせにきた。保育者は「わぁ、実がなってるね。Yちゃんがいつも水やりをしていたからかな」と声をかけると、Y児は「すごい！」と言い、うれしそうな表情でずっとオリーブの実を見ていた。

8月20日、園庭遊びをしていた時にN児が「オリーブの木を見に行こう」と保育者を誘ってきた。オリーブの木になった実を見ながら保育者に「見てみて！小さい！かわいいなぁ」と言い、うれしそうな表情で手の届く実を触りだした。すると、触りすぎてしまったのかオリーブの実が1つ地面に落ちてしまった。取れたオリーブの実をN児がどうするのかを見守っていると、オリーブの実をそっと拾って皮をむこ

うとし始めた。上手にむくことができなかったN児は保育者に「やって、やって！」と声をかけてきたので、一緒にしたがオリーブの実はとても硬く皮をむくことができなかった。N児は少し悲しげな表情をしながら「硬いね。ここに置いとこうか」とオリーブの鉢の土に実を置いた。オリーブの実はその後子どもたちのままごと遊びの材料になっていった。

9月20日になると、オリーブの実はさらに大きくなり色づいてきた。オリーブの実の色の変化に気がついた子どもたちは「色が違う！どうして？」と保育者にたずねてきた。保育者が「これはオリーブの実が大きくなって、色が変わったんだよ」と伝えると、子どもたちはうれしそうな表情で「大きくなったね」とオリーブの木に声をかけ、じっとながめていた。5月段階ではまだオリーブの木に興味を持っていない子どもも多くいたが、秋にはオリーブの木をみんなで観察するようになった。

＝考察＝

分園は園庭に土がないため小動物も少なく、本園に比べると環境教育につながる自然環境が乏しい状況である。しかし、そんな中でも環境教育はできると考え、子どもたちが自然に興味を持てるように保育者がプランターや鉢で野菜や野草を育てるなど、試行錯誤しながら取り組んでいる。今回の事例では、鉢植えの大きなオリーブの木が園庭に届いたことから始まり、子どもたちの植物への新たな興味が広がった。

0歳から進級したF児は、園庭に行くと育てている野菜をいつも観察している。この日もオリーブの木に咲いている白い花に気づいて、興味を持ち、手にした。結果として白い花は取れてしまったが、保育者が言葉をかけたことに対するF児の表情やそっと花を置く姿からその花に対するいたわりの気持ちが芽生えたように思われた。同じく0歳児から在籍しているY児はオリーブの黄色の落ち葉を集めていると、木の上に小さい実がなっていることに気づいた。緑色の葉と同じ緑色の実であるが、水やりと観察を日々続けてきたから、大人でもなかなか見つけられない実を発見できたと考えられる。そして、黄色の葉を美しいと感じる美意識や同じ緑色でも葉と実の形の違いを認識する力も、普段から関わってきているから育ってきているのだろう。N児はオリーブの実を触っていて偶然ちぎれてしまい、自ら皮をむこうとしたが結果としてできなかったので、N児は「オリーブの実はうまく皮がむけない」と実感しただろう。N児がなぜ実をむこうとしたのかは定かではないが、オリーブの実に興味を示し、自ら考えて行動した姿であることは確かである。

以上の3人の子どもの姿から、1歳児であっても自発的に自然の要素に興味や関心を持っていることが確認できた。また、保育者が見守りながら適切な関わりをすることで、より主体性や積極性が育っていくこともわかった。その後も子どもたちは観察を続け、オリーブの実が茶色から紫色に変化していくことに気づいた。自分で発見できた喜びとうれしさのあまり笑みを浮かべる場面もみられ、日頃水やりという世話と観察を積み重ねてきたから、愛着を持ち、そ

の心が表れたものだと考える。今回は、子どもが自ら興味を持ってまだ緑色で固い時に皮をむこうとしたことを保育者は忘れてしまっていた。子どもが自ら探索した皮むきという行動であったのだから、実が熟して柔らかくなった時に保育者から子どもたちに声かけして、もう一度試してみることもできた。これからも観察を継続してオリーブの実がどう変化するのか、木が1年を通して四季の中でどう変化していくのか、オリーブが育つには何が必要であるのかなど次の1年間の経験を積み重ねて、子どもと一緒に発見し、学んでいきたい。

### 3.6　0歳児

〈初めてのビオトープ〉

5月になると、0歳児の子どもたちも園生活に慣れて、泣かずに過ごせるようになった。園庭に出るとハイハイをして探索活動を楽しんでいたが、なぜかビオトープに近づく子どもは一人もいなかった。そこで、保育者が子どもを一人ずつ抱っこしてビオトープに行き、近くにあったカラスノエンドウを一緒に採って見たり「小川に何かいるかな」と話しかけ、小動物探しをしたりした。何日か行ううちに5月24日、S児（9ヶ月）は保育者が持っていたカラスノエンドウを手に取りじっと見たり、小川を指さしして「あっあっ」と言って楽しんだりする姿が見られるようになった。一方、T児（11ヶ月）は草が生い茂ったビオトープが怖かったのか保育者が抱っこしてビオトープに入ろうとすると、泣いて嫌がった。その後も園庭に出ると子どもたちと一緒にビオトープに行き遊ぶようにしたが、自らビオトープに行こうとする子どもはほとんどいなかった。

5ヶ月が経った10月14日、歩ける子どもが多くなってきたので、子どもを抱っこせずに保育者が一人でビオトープの中に行き、小川を見てメダカ探しをしたり小川の水を触ったりしながら子どもの動きを見ることにした。すると、それに気がついたT児（1歳4ヶ月）がじっと保育者の様子を見ていて、ゆっくりとビオトープに近づいてきた。春には怖くて泣いていたT児がビオトープに興味を持っている様子がうれしく「おいでー」と声をかけると、その言葉を待っていたかのように走って小川に向かってきた。すぐに小川の水に気がつき触ろうとするが、しゃがむだけでは手が届かない。保育者が「届かないね。もう少し前に行ってみる？」と言うと少しずつ前に行くが、小川の横の土が柔らかくてすべり、水に片足がはまってしまった。T児は「わー」と驚いた後、面白かったのか水の中で手と足を動かしてバシャバシャとし出し、声をあげながら大笑いしていた。その笑い声を聞いてH児（1歳5ヶ月）とK児（1歳2ヶ月）もビオトープにやって来た。H児はT児が片足を水に入れたまま水を触って遊んでいる姿を見て、すぐに真似して水を触り、小川の中に入りバシャバシャと遊んだ。小川の水が濁ってきたので保育者が「ここにはね、メダカさんがいるんだよ。バシャバシャしたら驚いちゃうかもね」と言うと、二人の動きが止まり小川から出てきた。その後も二人は水を覗き込

んだり触ったりして遊んでいた。保育者が「メダカさんいるかな」と一緒に覗き込み探したが、姿は見られなかった。K 児はその様子を横に座って笑いながら見ているだけだった。その後保育室に入り、絵本や図鑑に載っているメダカの写真を子どもたちと一緒に見て「ビオトープにはこの魚がいるんだよ」と伝えた。子どもたちはメダカの写真を指さしして、興味を持って聞いていた。

数日後、園庭遊びをしていると K 児の姉（4 歳）が「こっちにメダカいてるから来てー」と保育者を呼んだ。保育者が K 児の姉がいる池のところに行き、しゃがんで水の中を見ていると K 児も来て保育者の隣に座り、同じように水を見ている。保育者がメダカを見つけて「あそこにいるよ」と指さしをして伝えると、じっと見た後にメダカが泳いでいるのに気がついたのか K 児は手をたたいて喜んでいた。その後、他児も今までなかなか見つけられなかったメダカを見つけるようになった。

＝考察＝

子どもが初めてのビオトープに興味を持てるように、5 月は保育者が子どもを連れてビオトープに行っていたが、それを続けることで 10 月にはビオトープが楽しい場所ということに気がつき、子ども自らビオトープに行く姿が出てきた。なかでも T 児は当初ビオトープを怖がり嫌がっていたが、ビオトープに興味を持って見ている保育者の姿を見て、ビオトープは行ってもよい場所であることがわかり、関心を持つようになっていった。初めは慎重になっていた T 児だったが、小川にはまってしまった時に濡れることを気にせず、声をあげて喜んで遊んでいる姿から、ビオトープが T 児の思いきり遊べる場所に変わっていくだろうと予測できた。実際にその後も保育者を呼びに来て一緒に行くことが多くなり、自ら自然に関わろうという姿が見られるようになった。一度小川に入り思いきり遊んだこととメダカがいることに気づいたことで、その後は水の中に入らずそばにしゃがんで見るようになった。0 歳児クラスにおいても動物を大切にしようとする気持ちが芽生えているからではないかと考える。

ビオトープで遊んだ後、保育室でメダカの写真を見てビオトープの池にメダカがいる話をし

たが、その後も、K 児、T 児、H 児の 3 人はビオトープでメダカ探しを続けている。低年齢児であっても、このような体験を通して、生物と生物の住む環境に気づくことが確認できた。現段階では動くものを見つけて楽しんでいるだけかもしれないが、今後、様々な体験を通して、池にはメダカ以外にも他の動物が住んでいることに気づくだろう。また、最初はビオトープという場所そのものに興味が見られなかったが、次第に保育者や年上の子どもがいるからそこで一緒に遊び、真似をして小動物を探し始め、次第に自発的に行動し、夢中になって遊べるように変化していった。0 歳児も五感を使い様々なことを感じているはずだが、それを表現することは難しい。子どもの表情や動きからその気持ちを保育者が読み取り、言葉にして伝えていくことで、子どもは自分の発見や気持ちを確認したり、大人やまわりの子どものもつ価値観を受け止めたりするのであろう。0 歳児でも自然の中で継続的に遊ぶことによって、見たもの、感じたことが記憶に残り、保育者の働きかけや他の子どもから学び、積み重なって、多様な力が育まれてくることが確認できた。幼児期の教育として主体的に行動する力を育むことが求められているが、このような 0 歳児からの積み重ねによって育まれていくのであろう。

## 4　係活動

### 4.1　稲作係

今年も 5 歳児が稲作活動に取り組んだ。毎年、5 歳児の活動を見たり、自分の兄姉が経験した話を聞いたりして知っている子どもが多く、楽しみにしていたようだ。5 月の連休後に育苗箱に籾をまき、発芽を楽しみにしながら観察した。小さな芽が出ると喜び、水がなくならないように大切に育てた。

6 月 14 日に菜園の桶に田植えをした。一人 2、3 本の苗を持ち植えたが、うまく土に立たず「難しい～」という声が聞かれた。子どもたち同士で「ぎゅっと力を入れて植えるねん」とアドバイスしあいながら、田植えに取り組んだ。その後は当番活動で菜園に行き、水入れを行った。今年度は雨や台風が多くイネの生長が心配されたが、ぐんぐん大きくなり夏になると花が咲いた。「これがイネの花だよ」と説明すると、イネの花にぐっと顔を近づけて「小さい花！」「かわいい！」と声があがった。10 月には、イネの穂も重くなりお辞儀をしてきたので稲刈りを行った。子どもたちは保育者と一緒にイネの株を持ちイネを刈り、切り取ったイネの株をヒモでしっかりくくり、園庭に干した。その後、

割りばしや手で株から実を取った。玄米にするため、ザルの中に入れてすりこぎでこすって、籾がらを取った。脱穀して籾取りをするだけでも大変な仕事と思ったようで「昔の人は大変やな～」としみじみとつぶやいていた。その後、お米ができるまでにどれだけ手間暇がかかったかを改めて話しあうと、大変さをさらに実感している様子だった。

11 月 6 日に、「お米がスーパーでどのように売られているのか？」「どんな種類があるのか？」「どこの地域で作られているか？」を確認するため、みんなで見に行くことにした。近所のスーパーにお米が置かれたコーナーがあり、その日の売り出し品や色々な種類のお米が並んでいた。「あきたこまち」「ななつぼし」「コシヒカリ」「ひとめぼれ」など一つずつ名前を読み上げていた子どもたちだった。値段は 10 kg で 3000 円前後の袋が多く置いてあった。産地を確かめると、山形県や三重県、滋賀県等が書かれていた。「堺市や大阪は？」と探す子どももいたが、大阪府で作られたものは売られていなかった。自分たちが園で脱穀した玄米と同じものを見つけると「あっ、玄米ある！　一緒！」「売ってる！」とうれしそうに友だちと教えあう姿が見られた。売られている玄米の量と自分たちが脱穀した玄米の量を想像し「こんなにたくさんやったらお米いっぱい作らんとあかんな」「籾取り大変や～」と話す子どももいた。売られている米を調べることで自分たちの経験と照らしあわせ、どれだけ手間がかかったか想像している子どもたちの姿だった。園に帰り、スーパーにお米探しに行ったことを絵日記にした。一人一人見る角度が違い、お米を陳列している棚を見ている様子を描いたり、お米の種類を描いたり、値段を描いたり、個性ある絵日記ができあがった。

12 月に入り、みんなで脱穀した玄米をランチでいただくことにした。白米に混ぜて炊くと、白米より黒っぽくみえる玄米が所々にあり「あっ、玄米見つけた」と 1 粒 1 粒丁寧にお箸でつまんで食べていた。スーパーで売られていた玄米と自分たちの作った玄米と比べながら、春からの活動を思い出し、「ちょっとの量でも脱穀するのに力がいって大変やったね」「時間かかったなあ。」「売ってるお米の量をするのは大変やろうな」と話し、改めて感謝の気持ちを込めて玄米の味をかみしめて食べていた。

5 歳児は稲作でできた藁を使って「こも編み」をする。仕上がったこもで園庭のソメイヨシノとクヌギ、菜園のマツに、3～5 歳児でこも巻きを行った。こもを巻く理由を 3、4 歳児にも説明すると、春が来る頃にはどんな虫がいるかなと楽しみにしている様子がうかがえた。残った藁を園庭に置いておくと、「鳥の巣を作るねん」と言いながら鳥の家を作ったり、藁でままごとをしたりして、0 歳児から 5 歳児まで藁を使った遊びを楽しんでいた。また、5 歳児は藁を切って厚紙に並べて壁飾りを作成した。イネと同じ時期に植え育てていたワタの実を収穫していたので、来年の干支であるねずみをイメージして作成し、藁の台紙の上に貼って仕上げた。カラフルな壁飾りが完成し子どもたちはうれしそうに見せあっていた。

今年は、春から取り組んできた稲作活動を全員が絵日記にし、2 階の廊下に貼りだしていたが、写真とあわせて保護者や他クラス向けに図書コーナーに掲示した。お迎えの時や図書コーナーで他クラスの保護者や子どもが絵本を読んでいる時に、5 歳児たちが「稲刈りしたよ」「クモもいてた」「これ、藁を切って作った」と展示している絵日記のことを話すのを聞いたり見たりして、園全体に発信することができた。年長児の保護者だけでなく、小さいクラスの保護者にも大きいクラスの活動に関心を持ってもらうきっかけとなった。また今年から異年齢保育となったため、菜園への水やり当番も 3～5 歳児が一緒に行きイネの生長を見てきたので、稲作の掲示板を小さな子どもたちも興味を持って見ることができていた。稲作は日本の文化に深く組み込まれたものであるため、環境教育の観点からは自然が食や人々の生活とつながっていることを学ぶことができるよいテーマである。今後も、年間を通して自然と生活を結ぶ経験をどう深めればよいのかを考えながら取り組みたい。

### 4.2　エコ・マネジメント係

今年度のエコ・マネジメント係は、環境問題に関連する絵本の読み聞かせを継続し、各係が昨年度作成したチェック項目を実行しているかどうかを毎月確認した。また、「環境方針」に関するチェック項目を具体的に考え完成させた。

昨年度から環境問題に関する絵本を 0～2 歳児の乳児クラスと 3～5 歳児の幼児クラスにわけて、毎月 2 冊ずつ絵本の読み聞かせをし、内容や読んだ時の子どもの様子を担任に感想に書いてもらうようにしている。乳児クラスはリサイクルや環境問題を題材にした絵本の内容を理解することが難しいので、季節や植物等についての絵本を読み、季節や動植物に興味を持てるようにした。0 歳児は内容を理解することが難しいが、写真やイラストを見て興味を示す姿があり、1、2 歳児になるとアリやセミ等身近で見たことのある虫を見ると、「アリさん」「あそこにおる、ミーンって言っていた」という言葉が出るなどの反応が見られた。幼児クラスでは環境問題についての簡単な本と虫の生態が詳しく書かれた幼児用ファーブル昆虫記シリーズの本を読み、興味を持てるようにした。環境問題の本は 3、4 歳児にとって難しい内容であるが

「きえたごみ」という絵本を読んだ時に、子どもたちに「どうしたらゴミが減るの？」と問いかけると、3 歳児が「ゴミを小さくする」と言ったり「ゴミをわけて違うものにする」等の発言があったりして、ゴミをどうしたらいいのかを考える姿も見られた。他にも「もったいないってなんだろう」の本を読んだ時は、子どもたちに「どのようなことがもったいないのか」と問いかけると、「服やおもちゃを捨てること」「電気のつけっぱなし」等の意見がでた。5 歳児になると、「リサイクルしたらいい！」等再利用することもわかっている子どももおり、環境問題の絵本は、繰り返し読んだり聞いたりすることで、3,4 歳児の頃には難しかった内容も理解できるようになってくることがわかった。5 歳児は園内で出た牛乳パックを実際にリサイクルボックスへ入れに行くので、「リサイクル」が身近なことになっていると考えられる。絵本から学んだことから、結果としておもちゃを雑に扱わず大切に使うようになったり、水遊びをする時は園庭にある雨水タンクの水を利用したり、水の出しっぱなしをせず使う分だけ出したりと園の生活で自ら意識することにつながっているようだ。

昨年度作成した環境教育の観点からのチェック項目は各係の担当者に毎月確認してもらったが、どの係も対応できており（表 1）、各係活動で環境教育の観点からのチェック項目があると見通しを持って確実に係活動ができるとわかった。その年ならではの活動やこんなこともチェック項目としてあった方がよいという項目は、来年度用に新たにつけ加えることにした。保

**表 1　係活動のチェック項目例（園庭係）**

| 園庭 | | 令和　　年度　作成 | |
|---|---|---|---|
| 4月 | □ビオトープで遊んでいる様子をメッセンジャーで配信する。<br>□ビオトープにいる虫や虫の卵など、見つけた物を聞き取り、記録する。<br>□プランターの土をビオトープの周りに移す。 | 10月 | □ビオトープで遊んでいる様子をメッセンジャーで配信する。<br>□ビオトープにいる虫や虫の卵など、見つけた物を聞き取り、記録する。<br>□緑育の会を行う。 |
| 5月 | □ビオトープで遊んでいる様子をメッセンジャーで配信する。<br>□ビオトープにいる虫や虫の卵など、見つけた物を聞き取り、記録する。整理する。<br>□緑育の会を行う。 | 11月 | □ビオトープで遊んでいる様子をメッセンジャーで配信する。<br>□ビオトープにいる虫や虫の卵など、見つけた物を聞き取り、記録する。<br>□雑草の種を園庭に撒く。 |
| 6月 | □ビオトープで遊んでいる様子をメッセンジャーで配信する。<br>□ビオトープにいる虫や虫の卵など、見つけた物を聞き取り、記録する。<br>□小川の水域の確保<br>□6月末に池のミクリの葉を抜き、池を半分見えるようにする。 | 12月 | □ビオトープで遊んでいる様子をメッセンジャーで配信する。<br>□ビオトープにいる虫や虫の卵など、見つけた物を聞き取り、記録する。 |
| 7月 | □ビオトープで遊んでいる様子をメッセンジャーで配信する。<br>□ビオトープにいる虫や虫の卵など、見つけた物を聞き取り、記録する。<br>□黒メダカを放流する。<br>□小川の水域の確保 | 1月 | □ビオトープで遊んでいる様子をメッセンジャーで配信する。<br>□ビオトープにいる虫や虫の卵など、見つけた物を聞き取り、記録する。 |
| 8月 | □ビオトープで遊んでいる様子をメッセンジャーで配信する。<br>□ビオトープにいる虫や虫の卵など、見つけた物を聞き取り、記録する。<br>□小川の水域の確保　□雑草の手入れをする。<br>□雑草でリースやお面を作って遊ぶ。 | 2月 | □ビオトープで遊んでいる様子をメッセンジャーで配信する。<br>□ビオトープにいる虫や虫の卵など、見つけた物を聞き取り、記録する。 |
| 9月 | □ビオトープで遊んでいる様子をメッセンジャーで配信する。<br>□ビオトープにいる虫や虫の卵など、見つけた物を聞き取り、記録する。<br>□小川の水域の確保 | 3月 | □ビオトープで遊んでいる様子をメッセンジャーで配信する。<br>□ビオトープにいる虫や虫の卵など、見つけた物を聞き取り、記録する。 |

育者の義務として増えるが、着実に保育者の実力アップと保育の質の向上になると考える。環境方針のチェック項目は今年度完成したので、来年度から「環境方針チェック項目」を活用して、保育者は環境方針を意識して教育・保育を行い、実践できているかどうかを確認していく予定である。

### 4.3　園庭係

園庭のビオトープは造成後5年目に入り、年々池や小川周りの姿が変化して、雑草が根付き動物が確実に増えている。園庭係は昨年度に引き続き、池や小川の水量の維持管理や植物の管理をしながら、どのような動物が生息し自然の生態系がみられるかなどを子どもたちと観察し、子どもたちが動物や草花で遊ぶ様子や気づきの声を園庭ニュースで発信して、保護者や来園者に普段の園庭の様子や季節の移り変わりの変化を伝えていった。今年は池や小川の水量の管理が難しく試行錯誤することが多かったが、様々な原因を考え、植物が増えすぎたら抜いたり、池や小川の水深を調節したり、小川にワンドを作り水流の調節をしたりしてきた。

昨年7月にクロメダカを放流したが、生息することができなかった。食べ物になるミジンコ等が少なかったことや夏の暑さ、水量管理などが原因として推測でき、生息に適した環境になっていなかったと考えられる。そのような失敗をふまえ、今年は6月の緑育の会で保護者に協力していただき、池を整備し、水の流れの穏やかな場所を作って、水量を増やして酸素が行き渡り、ミジンコが多く発生するような工夫をした。そして7月に再びクロメダカを放流し観察した。実際に動く生物が見えると、0歳児から2歳児の子どもたちは喜んで目で追い、指さし、興味をもつことができる。数は減ったものの、12月に入ってもメダカの生息は確認できているので、維持されるかどうかを注視していきたい。これから先も色々な生物が暮らしやすい環境を保っていくことが課題である。

また、バッタなどの小動物が全体に増えたためか、今年は初めてジョロウグモが長い間大きな巣を張り、虫と格闘しながら捕獲する様子を子どもたちは何度も目の前で見ることができた。実際にバッタが食べられている様子を見ても、多くの子どもは可哀想と思いながらも巣を壊そうとはしない。今まで園庭の色々な小動物の様子を見守ってきた子どもは、経験を通して自然界の法則である食物連鎖を知っており、クモも生きるためには食べ物が必要であると理解しているからであろう。このように体験を通して生態系の存在と性質を知る、感情移入するできることがビオトープという環境の意義である。

10月26日、今年度2回目の緑育の会には、

多くの保護者に協力していただき、水が漏れやすい小川の上流付近の土を入念に叩き込んだり、池や小川付近の生えすぎた雑草を抜き川底をきれいにしたりした。雑草で覆われ見えにくくなっていた小川がしっかり姿をあらわすことで、いつも虫探しに来ていた子どもたち以外の子どもが、水の流れに惹かれて遊びに来るようになった。指を水の中に入れ流れの速さを確認したり、葉っぱを流して遊んだりして遊びが広がってきた。このように保育者や保護者が環境を整備することで、子どもの遊びが変わり、自分で遊びを考えて遊ぶ姿が見られるようになる。冬になると植物が枯れバッタ等の姿は見られなくなったため虫探しという遊びは終息するが、子どもたちは葉っぱに隠れた卵を見つけて観察したり、オオオナモミやエノコログサを見つけて草花遊びをしたり、様々な遊びを考えて遊びが広がっている。昨年以上に季節の変化に気づく姿が多く、ビオトープが子どもの遊び環境の一部となり、そこで好奇心や探究心が育まれる機会が豊かになっていると思われる。

### 4.4　カリキュラム・マネジメント係

カリキュラム・マネジメント係は、園長を含め昨年と同じ保育者5名で担当した。昨年度は、保育者の事務量を削減するために、カリキュラム等を管理するソフトに今までのデータを打ち込んでカリキュラムを仕上げたが、今年度はその内容確認をして、計画と実践に相違がないかを見直しをすることにした。

当園では、保育理念・保育方針に基づく教育保育課程をはじめ、各クラスの年間計画、付随して出てくる項目の年間計画を「カリキュラム」ととらえている。まず、教育保育課程を基に、今年度の担任が昨年度の担任に確認の上、年間計画を見直すことにした。各クラスの年間計画は以前から「年間生活計画」と「年間遊び計画」にわけて計画を立てているが、それらに基づいて保育が実施されているかどうかの確認方法について係で討議した。そこで、新たに「クラス会議チェック項目表」を作成し、毎月のクラス会議で実施を確認してもらうことにし、クラス担任にその作成及びチェックを依頼した。それにより、進行状況が可視化されるようになったので、年間計画（全Ⅳ期）のⅢ期からはカリキュラム・マネジメント係が進行状況の確認をすることにした。確認していくと、例えば、「年間遊び計画」の項目「絵本」において、子どもに読み聞かせをする絵本を年齢別で選んで月単位であげているが、実際にはその絵本が

なかったり、年齢ごとに同じ絵本があがったりしていることがわかった。そこで、全クラスの確認内容を集約し、照らしあわせて重なった絵本を割り出したり、足りない絵本を購入したりすることにした。また、絵本の内容が年齢や季節にあっているかを見直した。他の「玩具」・「造形・絵画」の項目でも同様の見直しが必要であることがわかったので、これらは来年度の課題としている。各クラスで色々な確認をしていくことで、保育者が教育・保育を見つめ直すことができ、園として大切にしたい内容が抜け落ちることなく実践されるようになるだろう。こうしたカリキュラム・マネジメントを継続することで、実践に意味のあるカリキュラムとなると考えられる。

また、今年度から 3・4・5 歳児クラスの異年齢保育を開始したが、教育保育課程及び年齢別の年間計画は変更していない。実際に異年齢保育を行う中で、年間計画や行事の取り組み方などに問題が生じる可能性もあったが、現時点ではあがってきておらず、今後、問題点が出てきた場合は検討していくことにする。カリキュラム・マネジメント係は、行事の必要性についても検討し、「行事のための保育」ではなく「文化を体験するための行事」と考え、子どもも保育者も時間をかけない方法で行事に取り組むことが大切という基本ルールを定め、保育者間で話しあった。「子どもが楽しむことができる行事は必要。そのためには決して教え込まない」ことが基本であっても、運動会と発表会は練習量が多くなることが現実である。この二つの行事については、「子どもが自ら参加したいと思っているか」「喜んで取り組むためにはどのように進めていけばよいのか」「子どもが仮にうまくできなくても次へのステップとなり、人生の大切な土台となる」「行事を通しても主体性は育つ」など様々な意見があがった。行事の存在を前提にして既存の方法をそのまま漫然と繰り返すのではなく、こうした討議を通して園としての共通理解を深め、行事の意義やそれを達成するための実践方法について保育者が常に自覚的であることが必要であろう。

以上のように、当園の保育方針や教育保育課程が形骸化しないようにするには、様々な視点からの見直しが必要であることが確認できた。今後もカリキュラム・マネジメント係として、保育者が困っていることや子どものために実践したいことを聞き取って、カリキュラムの見直しを行い、カリキュラムに反映させ、よりよい保育実践ができるようにしたい。

### 4.5　玄関ホール係

玄関ホール係は 3 年目の取り組みとなる。初年度は二十四節気を理解してもらえるように、子どもや保護者を対象としたポスター作りと季節のテーブル（玄関に季節の物を展示する棚）の管理を行った。二十四節気のポスターは季節の動物や植物、旬の食材等の写真を入れて 24 枚作成し、玄関に掲示した。季節のテーブルでは、旬の果物や野菜、植物を飾り季節を感じられるように取り組んだ。保育者自身が二十四節気を知らず、二十四節気はおよそ 2 週間で変わ

り、子どもには時間が短く定着しにくい印象があったため、2年目は子どもの関心が集まるようにポスターの一部をクイズ形式にしたり、保育者の意識が高まるように節気の一週間前には事務室に掲示して目に入るようにしたり、年間スケジュールに記入したりした。また、子どもの理解をより深められるよう子どもにもわかりやすい紙芝居を作り始めた。

3年目の今年は、ポスター掲示と季節のテーブルは維持しながら、紙芝居作りを引き継いだ。玄関ホールのポスターは、入り口にあるので子どもたちや保護者もよく見ていて、答えの紙をめくっている姿がたくさん見られた。また、自分たちが知ったことを今度は人に伝えたいという思いがあるようで、廊下を通る先生や保護者に「これは何でしょうか？」とクイズを出している。先生も「〇〇かな？」と答え楽しそうな会話をしている姿や、保護者もポスターの答えをめくりそれぞれ楽しんで興味を示している姿が見られるようになった。季節のテーブルは、触ったり匂いを嗅いだり自由にできるため、実際に触っている子どもが多く、色々感じとり「これは何だろう？」「なんでこんな風になるのかな？」と話していた。イガ付きの栗を展示していた時には、4、5歳児が最初は見ていただけだったが、触りたい衝動にかられて触ってみると「チクってするわ」「痛いなー」と言いながらも何度も触って「なんでトゲあるんかな？」と疑問が起こり、興味や関心につながっていくようであった。

紙芝居作りは、一つずつの節気の意味を子どもたちにもわかりやすい文章にしていったが、文章と絵があっていない、文字が多いなどの問題点が出てきて時間がかかった。特に、二十四節気を子どもにわかりやすい文章にすることが難しく、擬音や歌を入れ、身近な言葉で表現するなどの工夫をして文章を考えた。完成した時がちょうど「霜降」の時だったので実際に子どもたちに読んでみると、10月23日頃は霜が降りるほど寒くなるとされているが、実際はまだまだ暖かい日が続いており、わかりにくい様子だった。元々中国の気候に基づいて作られたため、日本の季節とあわない部分があるともされているが、地球温暖化の進行による気候変動が進めば、ますます現実とのずれが出てくる。幼児には気候の違いを理解することは難しいが、年長児であれば、そうした気づきを幼児なりに

もっている環境問題の知識と結びつけることも可能であろう。紙芝居として作り始めたが、1枚1枚は別の話であるため紙芝居とは呼ばず、紙芝居の紙1枚を平絵と呼ぶことから二十四節気の平絵と名付けた。二十四節気の平絵を節気ごとに紹介し、「玄関ホールのポスター見た？」「あのポスターの詳しいお話はね・・・」といった具合に玄関ホールのポスターと平絵を子どもたちが結びつけるようになれば、より深く関心を持って理解していくのではないかと期待している。

### 4.6　菜園係

〈本園〉

昨年に引き続き各クラスの野菜の栽培を手助けし、収穫してクッキングで使ったり、ランチの材料などにしたりして野菜の味を楽しめるように取り組んだ。また、コンポストの土を畑やプランターの土に混ぜ、3～5歳児は交代して子ども菜園係としてランチで使った野菜の皮をコンポストに入れ、水やりをした。今年新たに取り組んだことは、まず、全年齢の栽培表の更新である。栽培表には年齢ごとに植える野菜の種類や植える季節、いつ肥料をまき、収穫するのか等を記している。植える野菜の見直しをし、用紙も新しくして、多目的室の壁に貼り、保育者だけでなく子どもたちも確認できるようにした。

「菜園ニュース」も新しい取り組みであり、菜園へ行くことが少ない保護者に発信するため、菜園での子どもの様子や季節ごとに咲く花や木々、野菜の様子を写真に撮って説明したものを作成した。「園庭ニュース」と共に保護者が興味深く読んでいる姿をみかけ、保護者の理解促進に役立っている。今年の「緑育の会」では保護者に園庭と菜園にわかれて活動してもらい、菜園では子どもたちと一緒に蚊よけの液を作ったり枕木が傷んでいたので交換してもらったりした。菜園は樹木が多く、稲作用の桶に水が溜まり、夏になると大量に蚊が発生する。長袖、長ズボンを着用して蚊取り線香をつけても、数分もすれば蚊にかまれてしまう。そのため蚊が好きな匂いがする液をペットボトルに入れ、中に入ると出られなくなるように細工し、入り口や木のそばなどに設置した。子どもが保護者と一緒に協力して作り、どこに置けば効果があるのか相談して設置した。枕木は腐ったり一部抜け落ちたり古くなっていたので、新品に交換したことで、歩行もしやすくなり、見違えるほどきれいになった。子どもたちも喜び歩き回って遊ぶ姿が見られた。菜園では果樹やイネ、野菜など季節ごとに色々な花や実を観察することができる。子どもたちがのびのびと菜園で遊べる

よう菜園の整理、コンポストや畑の管理に努めたい。

〈分園〉

分園は本園と比べると園庭環境が整っていないが、少しでも環境教育につながる場にするため野菜・花・雑草のプランターを置いて育てている。野菜のプランターでは夏野菜を栽培し、子どもたちと一緒に世話をした。野菜の生長を目で観たり触ったり匂いを嗅いだりし、最後には収穫して食べることができた。またオリーブの鉢を新たに置いたが、少しずつ実が付き始め、緑色から黒色に変化する過程を観察することもできた。本園のビオトープで遊ぶ子どもの姿を見て、分園でも小さなビオトープを広げられないかと考え、本園からエノコログサやメヒシバを根がついたまま持ち帰りプランターに植えると、プランターいっぱいに広がり、分園の園庭でも草花遊びができるようになり、遊びがどんどん広がっていった。また、草が増えたためか、シオカラトンボやショウリョウバッタ、イナゴ、キタキチョウなどが姿を見せるようになってきた。子どもたちの中から「あ！　先生、バッタおるで」と喜びの声が響きわたることが度々あり、子どもの笑顔が増していった。6月には大きな桶の田んぼで田植えをしてイネの生長を見守った。この小さな田んぼでは、昨年田植えをした時に保育者が放流したホウネンエビを今年も観ることができた。卵を産んでいたと思われ、命の循環を感じる機会となった。秋になり稲穂の周りにはスズメが現れ、「とりさん、チュンチュンないてるなぁ」と子どもたちもスズメに気づくことができた。田植えから始まり、苗がぐんぐん生長し、子どもたちの背よりも大きくなっていく稲穂の生長を見守り、手作業で収穫・脱穀する過程を体験した。米作りの過程を知ったことにより2歳児クラスの子どもたちはお茶碗についたご飯粒をきれいに食べる子どもが増え、「ご飯粒残したら　もったいないばあさんくるで」と普段以上に最後の1粒まで大切に食べるようになっていた。低年齢児においても、こうした経験をすることで食べ物を大切にしようという価値観の育ちにつながることが確認できた。

昨年の秋に植えた冬野菜のダイコン・ブロッコリー・スナップエンドウが生長し、収穫する際には種を取ることを目的にして1株だけ残し種ができるのを待った。花が咲き終わり、緑の鞘ができ、その鞘が濃い茶色に熟すまで観察し、その後白っぽくなってきたので種を収穫した。子どもたちは野菜によって種の形や色が違うことを面白がって種取りがブームとなった。子どもは自然物に触れて遊ぶ時に五感を働かせながら関わるため、それにより遊びが広がることが確認した。条件が悪くとも保育者が試行錯誤しながら環境教育ができるよう環境を工夫していくことで、自然物を使っての遊びが広が

り、楽しい空間となっていくことがわかった。今後も限られた環境ではあるが自分たちができることを試していきたい。

## 5　保育者の自己評価

実践研究は10年目を迎えたが、停滞しないように「保育者集団のレベル維持」「保育者や保護者の園庭ビオトープに対する意識の向上」「保護者や地域との連携」の3つの目標を、年度初めに保育者が確認し、意識して取り組んできた。「保育者集団のレベル維持」については、自然遊びの専門家と共に月1回程度の少人数勉強会を引き続き行った。環境教育経験の長い保育者が半数、経験の浅い保育者が半数という構成であるため、どのように環境教育を取り組み、子どもたちに伝えていくのかを事例研究会で話しあってきた。研究会では、保育経験年数の異なる保育者の小グループを作り、個人で記録している毎月の事例から2事例を選び共感できる点や疑問点を記入者に話し、他にもこういう実践方法もあるなどを話しあってきた。小グループにすることで経験の浅い保育者も発言できる場となり、経験の長い保育者から今までの環境教育の取り組みや考え方も聞ける場になっている。経験年数の浅い保育者は、当初なかなか討論に参加できずに聞いていることが多かったが、次第に意見を言えるように変化してきた。また、今年度から子どもたちのビオトープでの活動を園全体で共有するためにSNS上でグループを作り、情報交換を行うようにした。その結果、担任クラス以外の子どもたちの活動を知ったり、遊び方の違いに気づいたりできるようになった。「保育者や保護者の園庭ビオトープに対する意識の向上」と「保護者や地域との連携」については、各係が保護者への発信を意識してニュース作成等に取り組み、保護者や地域の方に参加してもらう緑育の会を夏と秋に開催し、ビオトープの池や小川の整備、菜園の枕木階段の交換、近隣の雑草採取などに取り組んでいただいた。初めての参加の方もおられ、「楽しかった。次回も必ず参加します」「子どもたちが新しくなった枕木階段に気づく瞬間の顔がみたいなぁ」などの感想があり、ビオトープや園環境整備の意義に対する意識向上と理解につながったと思われる。来年度も保護者の方や地域の方にホームページやクラスニュースを通して連携を深めていきたい。

今年度も保育者が実践を振り返るための環境教育チェックリストを7月と12月に配布し自己評価を行った。自己評価の高かった項目としては、「子どもの主体性を大切にする」「植物で遊ぶ機会を作る」「常に質問を与え、子どもが自分で考えられるようにする」「生態系や食物連鎖など、つながりを意識する」であり、保育者たちは、「子ども自身が何をしたいのか意見を聞き、否定の言葉がけをせず共感するようにした」「園内研修や図鑑などで知った草花遊びや造形遊びを行う際に、園庭の雑草やどんぐりを利用できるよう準備した」「食物連鎖がわかりやすいようにポスターを作って、子どもたちが興味をもてるようにし、問いかけがあった時に

は答えるようにした」等の具体的な行動に移していた。

一方、自己評価の低かった項目は「コンポストに関わる活動に取り組む」「自分自身でビオトープの多様な生物についての知識を増やす」「子どもの批判的思考に気づく」の 3 点であった。理由としては、「毎日、当番制で調理室から出たその日の野菜くずをコンポストに入れに行っているが、子ども 1 人の回数と考えると少ない」「乳児クラスで毎日コンポストに行くのは難しい」「年長児の中で数名の子どもは、散歩途中の池の中にゴミがたくさん浮いているのを見て『このゴミ食べたら魚が死んでしまうなぁ』と言ったり、『畑の水やりや砂遊びには雨水タンクの水を使おう』など発言したりするが、他の子どもの意識は薄い」というような意見があがった。これらの項目を今後向上させるために、「園庭に出た際にはビオトープの変化を意識して探し、子どもの声や行動に気づくようにする」「コンポストの意義を保育者が意識して子どもに伝え、年齢ごとの関わり方を考え実行する」「保育者が批判的思考とはどんなことかを具体的に理解し、年長児を中心に保育者が普段の会話の中で知らせていく」という提案が示された。自己評価の低かった項目に関しては次の評価の際に一段階上げられるように個人の課題とした。保育者ごとに得意・不得意分野があるので、次年度は意見交換をして考えや経験を共有する機会を設けることにしたい。

## 6　次年度への展望

今年は大きな災害が相次いで起こり、なかでも台風 19 号が猛威を振るい、被害状況が何度もニュースで流れたため 3～5 歳児の子どもでも記憶に残ったようだ。園庭のジョロウグモは台風が到来した翌日からいなくなったため、心配した子どもたちには大きな台風の雨風が原因という理解があり、それをきっかけにして地球温暖化や環境問題の話をすることができた。こうした機会を積み重ねていくことで将来、環境保全に関心をもち、力を注げる大人になってほしいと考えている。

ビオトープは造成 5 年目となり、年々動植物が増え、子どもが遊べる環境になってきている。しかし、猛暑や池・小川の整備をしたこともあり、水量の調整が難しく、水量を増やすと小川の土を掘り起こして水漏れにつながるなど、修復のために時間が取られるようになった。年ごとに新たな問題が起こるため試行錯誤しながら対応しているが、次第に自然とはそういうものだと理解できるようになってきた。例えば、里山の自然を維持していくためには、人間の手入れが必要である。同様に、ビオトープに問題が出てきても当然と受け止め、取り組めるようになってきている。今後も子どもたちのために園庭環境を豊かに整備していきたい。また、子どもの活動を振り返ると、関心の高い子どもとそうではない子どもがいるが、関心が高くない子どもの場合は保育者が意図的に活動を考えたり、関心が高い子どもと一緒に活動したりす

ることで関心が高まることが複数の学年で確認できている。年齢の低いクラスのうちから、保育者が意図的に機会を作り、それを継続することで関心が高くない子どもの育ちにどう影響を与えられるのかを見ていく必要がある。

環境教育の実践研究として、保育者は、「毎月事例を書いて全正規職員で検討する」、「6つの係活動の一つを担い、活動して全職員に報告、協力を依頼する」、「毎月、少人数勉強会に参加して、自然の知識や子どもとの関わり方を学ぶ」、「年に2回の研修会に参加して環境教育とは何かを学ぶ」、「1年間の報告原稿を作成する」という5つの仕事を担当している。係活動は毎年それぞれの内容に応じた課題に応じて活動しているが、どの係でも保育者が力を入れれば入れるほど問題点が出てくる。問題点は次年度の係を担当する保育者に引き継がれるが、それが新しく取り組む意欲につながって、重荷になっている様子はない。係活動は翌年に向けて色々な課題に取り組み、保育に活かしていく画期的な方法である。1年間の実践報告（本稿）をまとめる際には、保育者は多くの事例の中から一つを選び、詳述し、考察を深めていく。自分の考えをまとめて文章化することに慣れていない保育者にとっては、毎月あげる事例を書く以上に難しいようである。しかし、この作業に従事することで、保育現場でみられる子どもたちの活動を意味あるものとしてとらえ、考えを深めることにつながる。この過程を通して「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を意識するようになったり、観察の視点が明確になったり、文章力がついてきているようである。

保育者にとって実践研究をすることは、毎日の保育にさらに仕事が追加されるという負担になる取り組みである。保育者自身の家庭環境や考え方により離職することも多い職場であるが、毎年入れ替わりがありながらも実践研究を続けてきた。しかし、10年間実践研究を積み重ねることができたのは、保育者が日々の保育の中で子どもの成長を読み取る力を持つようになり、成長を実感することができたからである。10年を経た現在、他園にも自慢できる環境教育になったことを保育者自身が実感できるようになった。また、合同研修会等、他園の保育者と交流する機会があっても、色々な面で自信を持って話してきたと保育者が語れるようになっている。

今年度は従来プラスチックの大きな桶で行っていた稲作を、菜園に田んぼを作って行えないかと検討を始めた。より本物に近い田んぼで田植えができるように、緑育の会で地域や保護者の支援もいただきながら、田んぼづくりを始める予定である。園庭はビオトープを中心に日本の自然をそのまま感じられる場として育てており、一方の菜園は田畑や果樹など人間の生活と密着した自然の場となるよう創っていく予定である。そのため、プラスチックではなく、小さくとも本来の姿に近い田んぼでの稲作をして、風景としての自然を子どもの心の中に残してもらいたい。こうした原風景が、将来、自然を守っていこうとする際の守りたい自然の姿になるからである。田んぼも水の管理という大きな問題があり、どのように取り組んでいくかが保育

者にとっては新たな課題となるだろう。

また、今年度は、本園の長年の環境教育実績が認められ、園舎の屋根に「そらべあ基金」の寄贈を受け、太陽光発電を設置することができた。環境教育の観点から活用していきたいと考えており、子どもたちに資源の大切さや無駄をなくす姿勢を学んでいってほしい。来年度は園で行われている環境教育を他園の幼児教育者にも知ってもらうように、積極的に広報活動を取り入れようと考えている。5 月に開かれる日本保育学会の研究発表をはじめ、何ができるか検討しながら取り組み、乳幼児期からの環境教育を広めていきたい。

**謝辞**

本実践研究については環境教育事務所「野の塾　工房たまご」代表後藤清史氏、「みどり環境共育事務所」代表神田浩行氏から多大なる知識提供及び協力をいただいていることに感謝申し上げる。太陽光発電の寄贈により本園の環境教育実践の支援をいただいたそらべあ基金にも謝意を表する。本研究の一部は、JSPS 科研費（課題番号 19K02717）により実施したものである。

**引用参考文献**

1）大仲美智子・海老澄代・米谷真夕子・霜野恵・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る　－幼児期の環境教育の観点から－，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，1, pp.36-49, 2011.

2）大仲美智子・海老澄代・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る－0 歳児から 5 歳児まで，園全体の取り組みへ－，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，2, pp.53-69, 2012.

3）大仲美智子・海老澄代・尾尻民・笹井邦恵・東直実・山口真由美・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る　－3－　～0 歳児から 5 歳児まで，実践 2 年目の育ち～，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，3, pp.72-98, 2013.

4）大仲美智子・海老澄代・笹井邦恵・尾尻民・玉嶋範子・青山明日香・西山千晶・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る　－4－　～保育者の意識を高める試み～，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，4, pp.98-121, 2014.

5）大仲美智子・笹井邦恵・玉嶋範子・矢越里花・田中英里・安食絵美・丸谷菜摘・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る　－5－　～保育士の主体的な取り組みの発展～，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，5, pp.41-59, 2015.

6）大仲美智子・笹井邦恵・尾尻民・福馬千裕・田中絢子・合尾ひとみ・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る　－6－　～環境教育の視点からみる子どもの育ち～，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，6, pp.91-125, 2016.

7）大仲美智子・笹井邦恵・尾尻民・森川靖子・岡本なつき・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る　－7－　～環境教育の視点から自然との関わりを深める～，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，7, pp.75-101, 2017.

8）大仲美智子・笹井邦恵・東直実・矢越里花・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る　－8－　～自然とのつながりを深める～，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，8, pp.61-90, 2018.

9）大仲美智子・笹井邦恵・尾尻民・合尾ひとみ・銀山みゆき・井上美智子：子どもと自然・命のつな

がりを知る保育実践のあり方を探る　－9－　～経験の繰り返しによる学びの深まり～，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，9, pp.45-76, 2019.
10）内閣府・文部科学省・厚生労働省：幼保連携型認定こども園教育・保育要領，フレーベル館，2017.
11）井上美智子・無藤隆・神田浩行：むすんでみよう　子どもと自然，北大路書房，2010.
12）井上美智子：幼児期からの環境教育　－持続可能な社会にむけて環境観を育てる，昭和堂，2012.